

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第3回

森の居候〈後編〉

居候のにゃんは家出して十日目に大怪我して帰ってきました。

森の彫刻家 上床利秋

怪我している前足を庇うように歩きながらもぺろぺろとなめるしぐさは、いかにも猫だなあ、などとのんきに眺めていると、どうもその足から腐れかかったような匂いがするのです。これはやばいことになりそうだということで、私は病院には連れて行かない取り決めなど棚上げにしてすぐに永山動物病院にて緊急手術を受けさせることにしました。正式名称「田吾作」という名札がつけられたケージににゃんを入れて病院にお願いし、別れ際に見た猫の目に見る心細そうな顔つきは忘れられません。

数日後、病院に引き取りに行くと、指は一本無くなったけど患部はしっかりと縫合されておりました。一丁前に葉までいただいて、病院を後にしたにゃんは車で杉アトリエに帰ってくると、急に元気にニャあ！と雄叫びをあげて嬉しそうに、そして前足を庇いながら森に消えていきました。今では傷もすっかり癒え



田吾作くん



「にゃんが行く」楠製 木彫 筆者作

て普段と変わらない生活をしています。

猫は恐らく猟師の仕掛けているイノシシ用罠にかかっていたのではと思われる。病院の永山先生の話によると、同じ場所で同じ怪我をしてくることもあるそうで、にゃんもまた怪我をすることもあるのでしょうか。でもまた病院に連れていくのがいいかは、程度にもよると思っています。

しかしながらまあ猫とは不思議なもので、あんなに心配し世話してやっても時には知らんぷり。かといって制作しているとペっとりとなでろと言ってくる。ツンデレというやつにそっくりで、こういうところが猫好きにはたまらないらしい。

少年時代に父が秋田犬を飼っていた経験から自分は犬派だと思いましたが、猫の彫刻的なフォルムのおもしろさと猫自体の性質を知るようになって、明治の大彫刻家・朝倉文夫先生の猫に対する制作のこだわりが自分にも少しだけわかるような気がしてきました。

日展会員 第一幼児教育短期大学 教授



「自由な時間」
テラコッタ製 筆者作



「よく獲たり」朝倉文夫 作
ブロンズ